

暴走する資本主義

ロバート・B・ライシュ著

(東洋経済新報社 税込価格2100円)

アメリカのリベラル派経済学者で、民主党の経済ブレーンを長く務め、クリントン大統領のとき労働長官として働いたこともあるロバート・ライシュの『暴走する資本主義』が、ビジネスパーソンや市民活動家などに広く読まれているようだ。

私が初めてライシュに注目したのは、90年代初めに発表された「The Work of Nations」(国家の役割)を読んだときだ。彼はこの本で、経済のグローバル化によって政治、経済、社会に大きな変革が起きていること、経済学的前提である「国民経済」は解体し、「地球経済」が形成されていること、国家の政治的役割は、グローバル経済で増大する所得格差、地域格差によって市民の結束をずたずたに引き裂く強烈な遠心力にどう対処するかだ、と書いていた。まさに10数年後の現在を予見した問題提起だった。

今回の本は、その後の資本主義の発展～彼はこれをSuper Capitalism(超資本主義)への進化と呼んでいるが～によって「資本主義と民主主義」の関係にどんな変化が起きているかを分析している。30年代に大恐慌を克服してから70年代まで、経済と民主主義は相乗効果をもって発展してきた。とくに第2次大戦後は空前の繁栄を謡歌し、すべての階層で所得が伸び、富と所得の格差が縮小し、巨大な中間層が形成され、資本主義と民主主義は一つの制度であるかのように密接に連動しながら発展してきた。

しかし、70年代後半以降、資本主義が「超資本主義」に進化し始めてからこの二つは切断され、資本主義が成功するほど民主主義は衰退してきた。消費者や投資家の地位は向上したが、市民、労働者の地位は低下した。

資本主義の勝利と民主主義の敗北と言う現代社会の基本問題にどう対処すべきか。ライシュは、企業の政治献金禁止をはじめ、資本主義が政治過程に進入するのをあらゆる手段で防ぐことを提案している。

久保孝雄(くぼたかお)

参加型システム研究所 理事長